

荒川は昔から今の流れだったわけではありません。
江戸時代初期に利根川から分離する川の付け替えが行われました。



瀬替え付近の現在の様子



昔は利根川に合流して東京湾に流れ込んでいました。



約400年前に入間川筋に付け替えられて今の流れになりました。

荒川の瀬替えとは

現在の荒川の流路は、江戸時代初期に行われた土木事業によってその原型が形づくられました。江戸時代以前の荒川は、現在の元荒川筋を流れ、越谷付近で当時の利根川（古利根川）に合流していました。

荒川はその名の通り「荒ぶる川」であり、扇状地末端の熊谷付近より下流で、しばしば流路を変えていました。関東平野の開発は氾濫・乱流を繰り返す川を治め、いかに川の水を利用するかにかかっていた。

江戸時代の1629（寛永6）年に、伊奈忠治が荒川を利根川から分離する付け替え工事を始めました。久下村地先（熊谷市）において元荒川の河道を締め切り、堤防を築くとともに新川を開削し、荒川の本流を当時入間川の支川であった和田吉野川の流路と合わせ、隅田川を経て東京湾に注ぐ流路に変えました。

この河川改修は後に「荒川の西遷」と呼ばれ、埼玉県東部を洪水から守り新田開発を促進すること、木材を運ぶ舟運の開発、中山道の交通確保や江戸の洪水防御などを目的としていたと言われています。

▶ 進展した新田開発

荒川と利根川の分離により、元荒川筋や綾瀬川筋では、旧河道からの灌漑用水の引水や残された池沼を溜井に造成するなどして、とくに下流域での新田開発を進めた結果、多くの新田村が生まれました。この頃開発された足立郡と埼玉郡の新田村は約109ヵ村にも及びました。

また、1629（寛永6）年荒川の瀬替えと同時に荒川水系中最も広く、しかも水量豊富な池沼であった見沼に溜井を造成し、見沼周辺で最も狭い木曾呂（川口市）から附島（浦和市大門木）にいたる約8町（約870m）の間に長堤（八丁堤）を築き、上流や周辺地域からの流水の貯留を図りました。

▶ 陸上交通路を守るためでもあった瀬替え

1629（寛永6）年の荒川の瀬替えは、中山道整備の一環として行われたとも言われています。陸上交通路は参勤交代制度の確立等により著しく重要性を増していく中、荒川の瀬替えは、江戸を日本政治の中心とするため、徳川幕府の国土経営の一環として行われたとも言えます。

中山道の整備・防衛にとって久下周辺が重要なポイントであり、そのためこの地点の洪水対策が必要欠くべからざるものだったと言えます。



荒川の瀬替えと中山道等の位置関係

コラム 備前堤

荒川の瀬替えにおいては、まず最初に綾瀬川が締め切られています。当時は綾瀬川が荒川の幹川だったようですが、「備前堤」という堤防で閉め切れ、荒川（今の元荒川）と切り離されました。「備前堤」という名は、江戸時代に関東郡代として、幕府の領地にあった伊奈備前守忠次に由来します。幅4メートル、高さ約3メートル、長さ約600メートルほどの堤と言われています。

この堤の完成によって、下流の伊奈、蓮田方面の村は洪水の害をまぬがれるようになりましたが、現在の桶川市域を含む上流の村は大雨の降るたびに田が冠水し、その被害は大きく近年にまで及んだといえます。

出水のたびに、上流と下流の村々の間で備前堤をめぐる争いがしばしばあったと伝えられ、現在も残る「御定杭」はこの争いを調停するために、土俵を積む高さを制限する目安とされたものです。

アクセス

元荒川起点の碑

瀬替えによって切り離されたそれまでの荒川は、湧水（現在は地下水）を水源とした元荒川となり、起点の碑が熊谷市佐谷田にあります

交通：JR高崎線 熊谷駅から徒歩で約17分

住所：埼玉県熊谷市佐谷田



元荒川起点の碑

